

<研究ノート>

簿記学談義

—理論・歴史・教育—

石川 純治

目 次

はじめに

- 1 研究への道—アイジリとの出会い
- 2 簿記教育の位置づけとあり方—検定簿記か歴史か、情報か記録か
- 3 簿記授業のシラバス—相対化の力を
- 4 三分法の問題性—仕入勘定の性格規定
- 5 教育上の工夫—本当の「学ぶ喜び」を
- 6 安平先生の「遺言」—複式簿記の見方をめぐって
- 7 日本のオリジナル理論—企業資本運動説と試算表等式論の意義
- 8 現実に存在しないものを考える—見えてくるもの
- 9 複式簿記の軽視という現状—現代会計のあり方と複式簿記
- 10 方法の重要性—「見えないもの」を見せる
- 11 「教養」としての会計学—本当に役立つとは

本稿は日本簿記学会特別研究課題「現代簿記論に関する研究」(橋本武久主査)のインタビュー(2012年2月28日、駒澤大学)において、理論、歴史、教育の観点から私の見方、考え方、そして教え方を率直に語ったものである。その最終報告書(2012年9月)のなかから重要と思われる箇所を抜粋し、若干の補筆修正を加えている。

インタビュー(本稿の抜粋箇所に関してのみ):橋本武久(京都産業大学教授)、和田博志(近畿大学教授)

研究協力者:竹中徹(石巻専修大学准教授、現淑徳大学准教授)

はじめに

橋本 本日は日本簿記学会、簿記理論研究部会の現代簿記論に関する研究の一環としまして、

駒澤大学の石川純治先生に、お時間とっていただきまして、どうもありがとうございます。よろしく願いいたします。じゃあ、ここから和田先生に代わりますので、よろしく願いします。

石川 ちょっとその前に、石巻から竹中さんが参加されていますが、石巻はご周知のとおり大震災で大きな被害をうけたところですので、インタビューに先立って、大震災の現地から何か一言お願いできれば有り難いですね。

と言うのも、阪神大地震のときもそうでしたが、これだけの大災害をまえにして、皆さんも同じ心境ではないかと思うんですが、自分たちがこれまでやってきたことに心底からの無力感や空虚感にかられてしまう。これは簿記会計にかぎりませんね。いったい何のための研究、そして教育なのか、そういう思いにかられます。

竹中 はい、何か一言ということですが、震災前に比べれば不自由もありますが、石巻中心部での生活はほぼ日常を取り戻した感があります。それに伴って、震災への関心の薄れを感じるようになってきています。無論、震災がもたらしたものはさまざまですから、そのすべてについて無関心でいるという意味ではありませんが、震災の被害や影響は同じく石巻に住んでいてもそれぞれに異なっています。

私のようにほとんど直接の被害を受けなかったものは、震災前とほとんど変わらない日常に、何事も無かったかのように錯覚することさえあります。時間の経過とともに震災への関心の温度差がいわれるようになってきましたが、被災地とそれ以外の地域にだけでなく、被災地内にも温度差がみられるように思われます。

震災このかた、被災を免れたというある種のやましさもあって、被災者や被災地のお役に立ちたいと思う一方で、公私共に大したことはできずにまいりました。震災直後から何度となく職場の同僚とも話しあってきたことですが、医学などは震災時に直接役立ちますし、工学などは復興に大いに役立ちます。それでは会計学はどうか。今に至っても答えは出ません。ただ、せめて関心を持ち続ける、そして、何か出来ないか考え続ける。それが大事なのではないかと、最近とみにそのように感じております。

石川 おっしゃる通り、「考え続ける」、これが大切ですね。特に、今どういう性質の危機にあるのか、それを深く考え続ける必要がある。なのに、1年という年月が、ふたたび日常的な仕事にもどしているんです。阪神大震災後と同じ経過をたどっているわけで、些末で“たこつば的”な仕事に終始する日常にぞっとすらします。一種の自己欺瞞と自己嫌悪。このインタビューもある種そうで、本来なら、受けるのに躊躇します。受けてはいけない、そういう気持ちがかかっていますね。

非日常がずっと、あるいは一生続いている人たちがいる一方で、その非日常が一過性、一時的な人たちが大勢いるわけです。簿記会計の教

育・研究もまたしかり。安泰な生活という大前提あってこそですが、その前提は危ういもので、いつ非日常化しかねません。確固とした根拠のあるもんじゃない。

ちなみに、竹中さんがいみじくも言われた「やましさ」なのですが、それをつきつめていけば、無力感ひいては自己否定的、あるいは自己欺瞞、そうやってきますよね。これに関連して、『複式簿記のサイエンス』のコラム6(「教養」としての会計学)、さらに「会計研究のアンビバレンス—たかが会計、されど会計—」(慶應義塾大学での講演、2004年一巻末の関連文献④:本誌次号の退職記念号に掲載予定)でも触れたんですが、簿記会計の研究や教育が真の意味での「教養」、それは自己形成や生き方に深くかかわりますが、そこにつながるのかどうか、あるいは「たかが会計、されど会計」の「されど会計」にどうつながるのか、そういう切実な思いや葛藤と密接にかかわります。

だから、そうした思いをぬきにしては、「会計研究のアンビバレンスはこれからもずっと続き、生涯解放されることはない」と言ったんです。そういう思いは、今どういう性質の危機にあるのか、あの「原子カムラ」なんかにも象徴されているんですが、まあそういった負の全体像といったものを考えると一層大きなものになっているといえますね。

問題は、そして切実な思いは、先にも言ったけど、簿記会計の研究がそことどうつながるか、かかわりうるか、つまり切り離されてはいないのか、ということです。この点は、あとの教育のあり方、教育観、という点で是非もう一度触れたいですね。

その1 インタビュー(前半)

—共通項目—

1 研究への道—アイジリとの出会い

和田 よろしくお願ひいたします。ではまず、最初に前半の共通項目のほうから、質問させていただきます。

最初に、先生のバックグラウンドということで、先生が大学に入学されて以降、どのようにして簿記会計と出会い、そして最終的になぜ簿記会計の研究者を志そうと思ったのか、そのきっかけ等につきまして、簡単にお話しただければと思います。

石川 この点、そういう質問があるだろうということで、関連文献の⑭を加えたんです。これはホームページに、先の「会計研究のアンビバレンス」という、慶應で2004年の1月にお話ししたんですが、これを詳しく見ていただければ、僕がこういう道に入ってきた、幸か不幸か、そのことを書いています(巻末の関連文献⑭)。まさに幸か不幸か、どちらかわからんです¹。

で、端的に言うと、アイジリとの出会い、これが非常に大きかったですね。アイジリ、これは院生のとき、(会計士補に義務付けられている)実務補修の時代なんですけれども、大阪の梅田での実務補修、公認会計士の2次試験合格後の研修ですが、そこでアイジリの話、それが井尻先生だということは、もちろん知らないんですけど、そのことに少し触れているんです。

アメリカからアイジリという著名な会計プロフェッサーが来日するからっていうので、日本の研究者がたいそう集まったという話なんです。ところが行ってみたら、日本人だったというわけ。アイジリじゃなくて、井尻だというわけです。それで評価がガタンと落ちた。ウソのような本当の話(笑)。これを大阪の梅田で私、聞いて、日本のアカデミズムの偏狭さというか、それを象徴する話だと思っんですよ。

私はそのときに、早速、実務補修の帰りに、梅田の書店で、今でも覚えているな、旭屋だったかと思うけど、『計数管理の基礎』という岩波の本、ご存じかな?これを買ったんです。『会計測定の基礎』の方は、その後で読むんですけどね。これが僕のそもそものきっかけです。

この話を慶應でしたんですが、要するに『計

数管理の基礎』、読んでない人たくさんいると思うんですが、線型計画法(LP)と会計、そこに数学と会計の融合というのを見たんです。その融合にあつと驚きましたね。これがアイジリ、井尻先生を知ったきっかけで、これが僕の出発点だと言えます。

その後、『会計測定の基礎』ですね、1968年出版、これで会計学にどんどん入っていく、はまっていくわけ。中西寅雄ってご存じかな、その著書が日経図書文化賞をとったときの講評を書いているんです。まあ余談ですけど、何年前かな、井尻先生の古希記念のパーティーをここ駒澤でやったんですよ。全国から先生方を集めて。たくさんの方が来られたんです。駒澤大学でお祝いのパーティーをやったときに、私そのことを紹介したんです、中西寅雄の講評をね。で、そのときの井尻先生の新聞の写真の話、俳優の誰かに似ているとか、余談めいたこともふくめ、いろんな面白い話をしたんです(巻末の関連文献⑮)。

中西寅雄はどういうことを言っているかというと、「科学としての会計学は著者によって初めて基礎づけられたといっても過言でないであろう」と絶賛していますが、8年ぶりの特別賞だということになるわけです。僕はそのときに、その形容、つまり「科学としての」、その「科学」ということが僕にとって非常に関心事になって、後々これにかなりこだわってきた。

井尻先生の作品でいけば、『会計測定の基礎』(foundation)から『会計測定の理論』(theory)と、先の『計数管理の基礎』、この3つの作品です、私の会計学へのきっかけはね。それで、修士論文はそのfoundationからtheoryへつながっていくなかで、まったく変わってないストラクチャー、公理的構造、それを僕は徹底して勉強したっていうのが、会計学との出会いというなら、そこは語らないと後々つながらない。そう思いますけどね。まだまだ、その後はあります。詳しくは文献⑭の「会計研究のアンビバレンス」

1 この点は筆者のホームページ上のブログ「会計研究のオポチュニティ・コスト」(2018年1月14日)に率直なところを記している。

を読んでもらえればと思います。

結局、僕は、後でカーネギーメロン大学に行くことになるんですけど、最初に赴任した福岡大学では、会計学の講義は一切もっていません。僕の担当はオペレーションズ・リサーチ (OR) ですから。だから福岡大学で、私が最初に書いたテキスト、これは福岡のローカルの出版社だけれども、『経営数学とオペレーションズ・リサーチ』というテキスト、1984年だから30年ほど前になるのかな。だから、会計学はいわば素人なんです。当時の学会所属はOR学会だけ。詳しくは文献⑭の「会計研究のアンビバレンス」に、カーネギーメロン大学での面白い話を書いていますからご覧ください。

一言だけ言うと、井尻先生にセオリーとか、いろんなことを教わったというよりは、一番の収穫は何かといたら人間井尻に触れたということなんです。井尻作品もさることながら、人間に触れた。だから「人間井尻」ということ、本当にそこにいろいろ書いています。

例えば少しだけ言うと、いつも手ぶらなんです。小さなメモとペンしか持ち歩かない。そういう尋常でないスマートさ。それから、何事も先送りしない、もう即決。決め方がめちゃくちゃ早い。そういういろんな点で、身近にいて井尻ファンになる人がいる。その人間井尻の魅力をどこに感じるか、そういうことを僕はそばにいて随分感じました。学問的権威じゃないということですよ。

僕はその後、実は井尻先生とある意味で全然違うタイプの、畠中とか。畠中福一の『勘定理論研究』、ご存じですか、森山書店の。これは驚いたね。僕が今でも印象に残っているのは金色のタイトル『勘定理論研究』、これはもう興奮して一晩で読み切ったんです。それでいくつで亡くなるのかな、畠中福一。若干26才だったかな。それから僕は木村和三郎にいて、こういう日本の古典をやっていくんです。

そういうふうに、OR から始まって、どんど

ん会計に入っていったんだけど、やっぱり根っここのところは会計に馴染まないところがある。ところが、いつもそれを押しとどめて、会計に戻されるといえるのか、引き戻されるきっかけは、またやっぱり井尻作品なんです。それは僕にとっては、幸か不幸かわかりませんが、その後のたくさんの作品は、少なくとも僕はもうかなり読んでいきました。

井尻先生の人となりは、放送大学のゲスト講師として出ておられますから、ここの駒澤大学の国際センターで、たいへん美しい日本庭園のあるところですが、そこでロケをしましたので是非ご覧いただきたいですね²。まだまだ、いっぱいあるんだけど、関心のある方はホームページに載せていますから。

その「会計研究のアンビバレンス」のサブタイトル、「たかが会計、されど会計」となっていますが、その「されど会計」をどう追求していくか、これが一番の課題でした。だから、僕の最初の「されど会計」を見つけたというか、発見したというのが、井尻先生の著作なんです。

でも、一般にはやっぱり「たかが会計」と思う人、たくさんいるでしょ。経済学やっている人なんか。口では言わなくても、学問的に低いものと思っている。まったく否定できない面もあります、そう思いませんか。

2 簿記教育の位置づけとあり方 —検定簿記か歴史か、情報が記録か

和田 ありがとうございます。では次に、少々簿記教育について質問をさせていただきます。まず、最初の質問ですけれども、会計学全体のカリキュラムの中で、簿記というものをどのように位置づけるかという点について、先生のお考えをお伺いしたいと思います。

石川 簿記教育の位置づけですか。どういうふうに答えたらいいんだろうね(一同笑い)。

2 ちなみに、日本簿記学会第34回関東部会(2018年6月30日、駒澤大学)では準備委員長として記念講演(笠井昭次氏)とは別に「特別企画：井尻雄士先生を偲んで」を設定し、そのお人柄が偲ばれる生前の貴重な生講義の映像を参加者に見ていただいた。

普通はどうなのかな、入り口だと言う人もいるでしょうね。まず簿記の、これまた後で出てくると思うんだけど、簿記検定の3級ぐらいが基礎だね。それはやっぱり、簿記と会計との関係ということにもかかわるでしょうね。

「簿記会計」か「簿記・会計」、その表記の意味内容にもかかわっている、と言ってもいいかもしれません。簿記学習から会計学習、それともそもそも区別されるものなのかどうか、後先の問題じゃないのでは、…とか。それぞれのとらえ方、考え方があるんだろうけど。

1つ、やっぱり歴史というものを重視する立場からすると、それはもう、全然また、ガラッと違う見方が出てくるかもしれませんね。これも後で触れたいと思うんですけど。だから、簿記というものをどういうようにとらえるか、考えるかということと、これと密に関わってくる話で、特に現代の会計を考えるときの、複式簿記の理論というものの意義というか、その位置というか、ほとんどIFRSばかりなんで、複式簿記の議論っていうのはほとんど出てこないでしょう。

だから、一番わかりやすい言い方すれば、今の会計の行き着く先は、複式簿記不要不在の会計。だってそうでしょ、IFRSの勉強している人たち、別に複式簿記とか簿記の話、まず出てこないじゃないですか。しかも期中(取引記録)よりも期末(評価)、記録よりも情報、こちらが重要という話ね。端的に表せば、期末>期中、情報>記録(記号>は優位性を表す)。あとでまた議論しましょう、とりあえず。

3 簿記授業のシラバスー相対化の力を

和田 ありがとうございます。続きまして、こちら大変難しい質問になってしまうのですが、先生が理想とされます簿記の授業のシラバスというものを、もしございましたら、お示しいただければと思います。

石川 そんな、もう大家の先生が答えることで、僕なんか別に考えてもいないんだけど。安平先

生とか、その大家にインタビューするような話で。実際、僕はシラバスなんか全然ないんだけど、もし僕が何か講義せよと、そして1つの体系というか、組織だった講義をやれと言われてたら、僕は去年出版になったこの本、『複式簿記のサイエンス』(巻末文献⑦)、この本の構成、順番にそって話をしたいですね。

例えば本の帯に、帯なんていうのはみな捨てちゃうだろうから、読みはしないだろうけど、ここに書いてあるとおおり、つまり常に問いを、それもビッグ・クエスチョンを出すわけ。例えば、帯に書いているように、①現行の貸借複式の仕訳方法は唯一絶対のものか、②なぜ複式から3式への展開を考えるのか、③言語としての簿記の本質は何か、④利益とキャッシュはどのような関係にあるか、⑤なぜ発展的にとらえることが重要か、…こういった問いに即したシラバスというのを、僕の本はそういうかたちで、5つのテーマ構成(テーマI~V)をとっているんです。

もちろんこういうことをやっている人は、誰もいないと思うんですけども。そして、各テーマにのなかで4つ、5つの問いかけをしています。ですから、全部で20ほどの問いになるわけです。こういうものを組織化し、体系化して、教育したいですね。全体的、系統だった教育という点を大切にしています。

これは後の話とも関わるんだけど、「簿記の3級、教えないんですか?」、こう言われると、正直言って教えたくないんです、少なくとも大学では。大学での簿記教育のあり方っていうものを、やっぱり真剣に考えるわけですよ。専門学校でやっていることを大学でやって何ら問題ないという考え方もあるでしょうし、簿記教育は日商検定の3級プラスアルファぐらいで十分だという人もいます。それはそれで1つの考え方かもしれない。

じゃあ僕はどうかといたら、僕はそういう考えをとらないな。やっぱり専門学校じゃない、大学に来た学生を教えるとなると、自ずとそれとは違う教育があるべきだろうと。そういう意味では、僕のこの本、TACや大原で絶対教えら

れませんよね(一同笑い)。

実は、例えば1年生なんか、簿記を知らない学生、僕は他の大学の集中講義でこの本を使って教えていますけど、意外かもしれません、けっこう集中的に理解してくれますよ。だから、放送大学の講義で、それを私が中心においているんだけど、「学ぶ喜び」っていうかな、喜びの内容、性格っていうか、質の問題ですよ。3級から2級、さあ難関の1級、これまた、ある種の喜びだよ、それは僕もわかる。でも、歴史の中で生々しく発展してきた、そういう歴史の中で簿記会計というものをとらえていく、この喜びとは、やっぱり性格が違うと思うんです。

ですから、一言で言えば、大学で教える簿記教育の1つのあり方は、端的に言えば、どこかに社会科学の観点が入っている簿記会計、つまり社会科学としての簿記会計。で、問題は、社会科学としてということを、どういうふうに理解するかですよ。どうしても、それは歴史の文脈でとらえるっていうこと抜きには、やっぱり社会科学としての簿記会計っていう教育は決定的に欠落するだろう。僕はそう思っている。だって数学だって数学の歴史がある。自然科学だって歴史あるわけよ、そうでしょう。だから理想とする簿記教育は何かあっていったら、本の最後あたりにも書いているんだけど、「見えてくる」学習という点、ここを強調したいですね。

そのキーワードは何かというと、この本で最後まで徹底したのは、一貫しているのは、読まれた方はわかると思うんですけど、ずばり「相対化」です。それも2つね。歴史の中で相対化するっていうのと(史的相対)、それから理論、論理の中で相対化していくっていう(論理的相対)、この2つあるんですよ、相対化というのは。それはまたどこかつながっていくんです。それが僕の理想とする、もし理想とするものが何かと言われたら、この相対化の力をつちかうということ、これが僕の教育の根本にあ

るね、そういう教育をしたいね。本の最後あたりで、端的に「相対化なくして真の姿は見えない」と言いました。これです。

そうになると、もう専門学校あるいは検定簿記だとか受験簿記とはまるで違う簿記の「理解」(understanding)というものが、学生のなかに入っていく。それは、この「知る喜び」とか、「学ぶ喜び」という、僕が思っている、また実際経験してきたその喜びに、やっぱりつながっていくんだと思う。3級から2級への喜びとは、また違う性格だろうと。大学で本来、学生にそういう喜びというかな、きっかけを与えていくものは何かと言ったら、僕はそちらだと思う。これは専門学校の先生方、失礼だけど、教えられないんです。でも現実には、そういうものではないですね。専門学校と同じ検定・資格教育をしているわけ。

だから3級あるいは2級の資格とっている学生は、ある種の単位互換みたいなかたちで、私はそういう、まあはっきり言えば安易だと思ってるんだけど、なんで安易かというと、そういう理想から見たらもう典型的でしょ。教えもせずに単位、それも3級の資格があれば単位を(笑)、しかもAを与える。それは安易な教育になってないかな、そう思いますけど。少なくとも、本来の大学教育からすればね³⁾。

※インタビュー(前半)での下記4~7は5を除いて割愛。なお、5はタイトルを変えて本稿では4とする。

- 4 基本等式と勘定理論について
- 5 商品売買取引の処理方法について—三分法の問題性
- 6 財務諸表と帳簿の関係について—キャッシュフロー計算書と帳簿記録
- 7 帳簿組織について—記録の媒体と記録の方式

3 この点でいえば、ドイツ型やフランス型あるいは戦前の日本にあった複線型の教育制度に優れた面があるように思える。拙稿「複式簿記の見方・考え方・教え方—理論・歴史・教育の接合—(下)」(駒澤大学『経済学論集』第44巻第2号、2012年12月)82頁脚注80参照。

4 三分法の問題性—仕入勘定の性格規定

和田 ありがとうございます。続きまして、商品売買取引の処理方法について、先生のお考えを。

石川 まず、分記法、総記法、三分法、皆さんどう思っているんだろうね。三分法っていうのはいわばワルプ的で、擬制でしょ。でも、簿記検定3級で絶対これやらないとね。

和田 そうですね。

石川 だから、期首商品、期末商品のあの仕訳を、どうやって説明するかちゅうわけよね。僕はもう徹底して、わかりやすく教えるんですけどね。(笑)

あの仕訳は売上原価をどうやって計算するかという話だから、きわめてテクニカル。だから分記法、でも素朴な分記法も問題あるね、総額主義に反するから。では、総記法はどうだ、総記法は分割する前の話だから、あれはもう、すごい混在があるわけですよ。だから総記法から三分法にいくわけ。

でも、キャッシュフロー計算の話になると、実は(損益計算が目的でない)分記法なんですよ、実際の出入りだから。だから、総記法、三分法については、この文献⑤(『キャッシュ・フロー簿記会計論』)58ページ、注20に太字で「総記法」って書いているでしょ。これと注21を見といてもらえば。

総記法では商品売買損益が貸借差額になるんですよ。これは皆さんもよく知っていると思うんですけども。注21ですが、特に安平先生の考え方や、それから茂木先生、会計史の観点から、こういうところ面白いね。

和田 先生、私の記憶が確かなら、ご著書の中で、売上高・売上原価表示法が、最も理論的な方法であると述べられておりましたが。

石川 僕はそう思う。やっぱり売上原価という

独立の勘定でやったほうが、学生もわかりやすいし、なんで仕入勘定で売上原価を計算するんですかと問われたら、もっともなことだと思いますよ。そこにも何か理屈があるようにもみえますが、むしろ独立させて、売上原価の勘定をもってくればいい。そう思いますね。

和田 はい。私も最初から、売上高・売上原価表示法で教えればいいのかと思うことが多々あります。最初はどうしても、簿記のテキストで分記法が取り上げられていますので、商品の仕入れは商品勘定を使うように教えますが、そのように理解した頭で、突然、三分法が出てきましても、仕訳に仕入勘定を使えない学生が多いです。

石川 理屈のたつ人だと、三分法での仕入勘定の性格はなんだと、こうなるわけですよ。

和田 そうですね。学生に仕入勘定は何勘定だと思いか、と質問することがありますが、答えに詰まる学生が多いように感じますね。

石川 だから、つまり仕入勘定の性格はフローの勘定か、ストックの勘定か、理論的にはそこまでいくのよ。売上高・売上原価表示法だったら、何も問題ない。

これは、茂木先生が随分悩んでいたみたいです。明治大学におられたときに寫村先生と論争めいた議論があった。茂木先生から後で聞いた話しだけ。

さて、次は大陸式と英米式ね、帳簿組織の1つの問題だけど、一般に帳簿組織が好きな人は余りいないな。もっとも簿記的などころだけどね。実は、僕も好きでない。

われわれずっと英米式でやっているでしょ。大学入試センター試験などでもあんまり大陸式なんか見たことないしね。繰越試算表だからね、みんな英米式だよ、前提としては。だから、人によったら、あんまり本質的じゃないって言うんだけども。

問題は残高勘定でしょ。(大陸式では)残高勘

定も、元帳につくってそして振替やっていく。厳密と言えば厳密よね。継続性がきちっとしているんだから、期首、期末の間が。それは面倒くさいというので、ある種の簡便だといって、英米式がくるわけでしょ。

5 教育上の工夫—本当の「学ぶ喜び」を

和田 ありがとうございます。では次の質問ですけれども、簿記教育にかかわる諸問題と教育上の工夫ということですが、先ほど、要は専門学校で教える簿記と、大学で教える簿記は、当然違ってなきゃいけないという先生のお考えは、よくわかりました。他に何かございましたら、お話しいただければと思います。

石川 これももう、やっぱり大学で教える簿記教育っていうのは、僕の考え方、教え方からすると、それは単に簿記の教育に限りませんが、つまり僕は1つの素材だと思ってるんです。もちろん簿記を教えるんだけれど、それも教育の1つの素材として。じゃあ、簿記を通して何を教えるのか、というわけですが、やっぱり考え方でしょ。思考のあり方っていうものを。

例えば先の「三分法」の話にあったんだけど、なんでその期首と期末の仕訳、ああなるのと。そうなるんだから、覚えよと。トレーニングやと、ラーニングじゃないんだと。習うより慣れよ。そういうわけですね。それはあるよ、確かに。でもそれじゃ、何の理屈もわかったらんわけですね。

理屈がわかると発展があるわけ、応用がきくわけです。この応用がきく、という点が大切なところですよ。売上原価の勘定、これを独立させるっていうの、やってみなさいとか。ちなみに言うと、そのとき期首と期末の商品だけでなく、あらためて仕入勘定(当期仕入額)の仕訳処理が理解度のチェックになる。これができれば、とたんにもとの「三分法」の正体が見えてくるわけね。そうなってくると簿記の教育、あるいは教育を受ける側が、この喜びの性格がグッと変わっちゃうわけよ。パターン化された問題の

トレーニングっていう話じゃないんだから。どんどん発展していく。それは現実の実務にないものまでいくわけよ。

それはまた後の話になるけど。実務に存在しないものまで考えるわけよ。それを考えると、今度はその実務にないものから、現にあるものを見ちゃうでしょ。そうすると、たちまち実務つまり現にあるものの相対化が起きちゃうわけですよ。こういうことを教えないといけない。僕は、うちの学生でも、でもなんて言ったら失礼だけど、それが必ずできるんだという確信をもって、100人、200人いたら、10人でも20人でもいいから、そういうことをやっぱり考えていかないと、教育していかないと、やっておられないわけだよ(一同笑い)。

要するに、まだトレーニングすらしないんだから、ましてラーニングまでいかないわけよ。だからトレーニング、トレーニングで獲得していく喜びと、ラーニングして、ラーニングして獲得していく喜びというのは、その性質がまったく違うんです。ですから検定簿記の話も一緒です。もう僕の言ったことで、想像つくと思いますけどね。

和田 はい。簿記を学ぶではなく、簿記を素材として、物の考え方を学ぶということですね。

石川 僕はすべて、もう、会計教育もすべてそういう観点です。ここにも書いているんだけど、理論、歴史、そして教育、そのすべての接合、総合というところ、ここが重要なんです。注意してほしいんです。バラバラじゃない、一体化して。

橋本 そのときの先生、理論と歴史はわかるんですけども、例えば学問的体系、制度とかですね、このところの簿記っていうもんはコミットするんですか。

石川 制度、端的には会計基準かな。

橋本 ええ。これはまた、後でしたほうが、い

いかかもしれませんけど。

石川 それはまあIFRS偏重の今の制度や教育のあり方、そういうのを見ていると、よくわかるんじゃないかな。さっき言ったよね、期末>期中だとか、情報>記録と。不等号の右辺側、つまりより小の側にきている「期中」、「記録」というのは、すべて簿記と関係するわけよ。

それに対して左辺側の「期末」、「情報」、それが右辺より大、つまり優位というのが今の会計のあり方というか、性格なのよ。そう思いませんか？そこに簿記(前者)と会計(後者)との乖離があるわけ。

だからその象徴たるものとしては、端的に、どうして「情報開示が利益を生むか?」、僕はこう問うたんです。そうすると、制度の話でいくと、会計基準っていうものと複式簿記とがどんどん離れちゃうわけよ。しかも、情報の開示志向が伝統的な記録計算の領域に侵入、侵食していく、情報開示優位のもとでね。「記録」(証拠性、信頼性)よりも「情報」(有用性)重視ですよ。

話もとに戻すと、教育のあり方、ここが一番大事ですよ。だからトレーニングっていうのは役立ち志向ですが、ラーニングっていうのは、本来的にそういう、すぐに役立つものじゃないんです。そういうものを大事にせんといかんと。だからレジュメ資料(補足の2-1本稿では割愛)に、私が放送大学で「学ぶ喜び」ってことを強調するわけですが(あとの付記参照)、特に第1回の講義でそれをお話するんです。

けれども、簿記も会計もビジネスのスキル、大学でそのスキルを教育する。しかし、スキル教育は教育の1つの側面でしかない。役立ち、それもすぐに役立つ教育、資格や検定のための教育がその典型です。しかし、逆に言えば、それは明日すぐに役立たなくなってしまうがちです。

今日の就職事情からすれば、大学でのキャリア教育の必要性はわかりますよ。言い方は悪いけど、大学が職業訓練校化しているわけ。職業教育と教養教育(リベラルアーツ)とは必ずしも両立しませんね⁴。で、本当に役立つものっていうのは、やっぱり真の意味での「教養」というものと結びつくっていう話、通常言われる教養じゃなくて、カッコ付きの「教養」ですけどね⁵。大学で本来教えること、そして学ぶものは、ここです。簿記や会計の俗っぽい分野であつてもね。

和田 ありがとうございます。一応前半の最後の質問として、今後の簿記会計教育に望むこととありますが、今までのお話で(一同笑い)、ほぼ。

石川 望むことを一言でと言われたら、やっぱり学生に「学ぶ喜び」、fun to learn、それは何かということですね。その「喜び」というものの性格っていうのかな、性質っていうものを、教える側が真剣に考えないといけないじゃないでしょうか、っていうことです。

さっきも言ったとおり、「相対化の力」といったものを目の当たりにしたら、本当に実感したら、学生の喜びっていうのは3級や2級の喜びとは全然違ったものになってくる。それは別に簿記会計に限らないですよ。僕はそういうふうにして、うちの学生にも言っていますけど、そういう教育観といったものを持たずに教壇に立っていても、教える側の士気とかいうのか、それが働かない。教える側に士気や情熱なくして、学生にどうして感動させられるか、ですよ。

問題は、大学のレベルにもよるでしょうが、その情熱の性質、受ける側の感動の性質がどういふものか、ということですね。それぞれ人の考え方、教え方によって違うでしょうけど。まあ1時間ぐらい義務だから検定簿記やりやいい

4 この点は、先の注3でも言及したように、高等教育制度のあり方(単線型、非多様性)自体に改善の余地があるといえるが、その1つとして放送大学に代表される遠隔教育の制度的活用があげられる。

5 この点は、ホームページ(「講演」コーナー)掲載の「私が考える教養教育ーリベラルアーツとは何か」参照(駒澤大学『文化講演集第18輯』2016年所収)。

と。僕はそれやったら、士気どころか、もう疲れて駄目ですね。教え甲斐、教える本当の感動がない。

※付記：fun to learn－放送大学8年間

インタビュー（前半）の終わりにあたり、先の5での「学ぶ喜び」(fun to learn)ともかかわって、8年間にわたる放送大学での教育経験の一端を付記させていただこう。

放送大学は英語でオープン・ユニバーシティというように、入試もなければ年齢・職業・居住地も問わず、学ぶ意欲を持つ全ての人々に開かれた極めてユニークな大学である。全国で9万人もの学生が学んでいることは余り知られていない。

特に入学の動機がすばらしい。例えば、高卒後挽回して大卒に、子育てを終えた主婦の再出発、退職後の第二の人生のため、あるいは社会貢献など様々だが、すべてに共通しているのは真に学びたいという意欲であり、通常の大学では余り見られない入学動機の志の高さである。

重要なのは「生涯学習」と「教養教育」という点である。今すぐに役立つだけの学習が教育ではないはずで、生きていく力や豊かな精神を育む真の教養教育が今日とりわけ大切といえる。

その30周年記念宣言(2013年)には「生涯学習と遠隔高等教育のパイオニアとして、様々なメディアを活用し、学びから世界を広げようとする全ての方々に、より一層開かれた大学となることを宣言します」と記されている。まさに学びから世界を広げようとする人たちに、真に学ぶ喜びを得ようとする人たちに、放送大学の存在を知ってもらいたい思いである。

その放送大学の卒業式に参加したが(2014年3月)、会場が渋谷のNHKホールというのも放送大学らしい。全国各地から年齢も様々な卒業生が一同に会する様は、一般の大学ではみられない光景である。

ちなみに、卒業生の年齢、職業、学歴の多様さはまた放送大学ならではの、20・30代が3割、40・50代が4割、60代以上も3割、また高校・短大・高専卒が7割、大卒も3割いる。立場や

状況を異にする様々な人々が放送大学で学んでいる。そのことを目の当たりにする卒業式で、その模様はテレビでも放送されたが、特に学部と大学院の総代の自らの体験を語った謝辞は素晴らしかった。

毎年、大学院を含め5千人ほどの学生が、「いつでもどこでも、見えない友と共に生き、共に学んだ」(学歌)思いをそれぞれ胸に巣立っていく。まさに「生きるとは学ぶこと、学ぶのは楽しみ」(同)を実感して。

その2 インタビュー(後半)

－個別項目－

和田 それでは、後半の個別項目へと進めていきたいと思えます。石川先生からは、事前に資料をいただきまして、大変助かっております。ありがとうございました。一応いただいた資料に即するようなかたちで、私のほうで質問していきますので、特にこの質問にとられることなく自由にお話していただければというふうに、私としては思っております。

6 安平先生の「遺言」

－複式簿記の見方をめぐって

和田 最初の質問ですけれども、先生がお考えになっておられます複式簿記というもの、つまり先生はどのように複式簿記というものをとらえておられるのか、特に単式簿記との対比の中で、その特徴を、まずはお話いただければと思います。よろしく願いいたします。

石川 事前にお渡したレジュメ資料の冒頭にもでていますが、安平先生の「遺言」ですね。2004年5月です。冒頭で、「ある意味で、遺言のつもりでお聞きになっていただきたいと思えます」と言われて、終わりにといるところで、もう一度、「一つ遺言のつもりで記憶にとどめておいていただきたい」と。つまり、冒頭と最後で、遺言のつもりだと言われているんです。実際この後、これが2004年の5月ですから、2

年後に亡くなりました。本当に残念、無念の思いです。

その遺言の意味合いというのが重要です。われわれは、若いメンバーはじめ、この安平先生の「遺言」と言われたその意味合いを理解することが、私は大事だろうと思うんです。それで、そのことを書いたのが、文献の⑥(「資金計算書の歴史的展開と数学的展開」2007年)で、その最後のところで、私は安平先生とは懇意にさせていただきましたので、この拙稿は安平先生の遺言への「鎮魂を込めた一つのレポート」だ、こういうふうにかかせてもらいました。

そこで、私が「安平問題」と名づけたこの大きな宿題(problem)、それは何か。いくつか重要な点が触れられていますが、端的にはそこに書いているんですが、複式簿記の見方、複式簿記観っていうものの安平先生の考え方、そして安平先生の考え方とは異なる考え方、これを安平先生にもっと長生きしていただいていたら、おそらくそこはやっていただけたと思うんですが、遺言というかたちで言われましたので、まさに遺言として残されてしまったんです。

じゃあ、安平先生の考え方というのは、複式簿記の見方とは何かというと、講演では次のように言われているんです。「何らかの人工の加わった記録・計算の道具」だとね(講演原稿より)。これを私は端的に、「人工的弾力的道具観」とよびました。さらに「その弾力性に何を盛り込んでいくかということが、やはり、その時代時代の要請に応じた簿記の記録の仕方ではないか」、こういうふうに使われています。

それから、それとの対比において、こういうふうにも使われています。「笠井説と私の説との基本的な差は、複式簿記が企業資本の秩序の自然の表現であるか、それとも、人工の加わった記録・計算道具か」と。遺言のなかでもこの重要な論点から議論を始めると、比較的わかりやすいと思うんですね。

余談ですけど2年前になるかな、橋本さんからインタビューのお話があったときに、僕はすぐにメモを書いたのは、ここから議論をはじめたらきっと面白くなるな、ということをおね。と

ころが安平先生のこの遺言、その重要性に気づいている人、あまりいないんじゃないかな、そういう気がするんです。だから、僕はこのをもっと読んでもらいたい。

で、弾力性というのは、柔軟性とかフレキシビリティということで、私は、その安平説に立つと、複式簿記のどういうことがわかり、どういうふうなフレキシビリティ、弾力性、時代時代の要請を盛り込んでいけるのか、このことをもっと追求してみたかったんです。それで、かたや、笠井説と書いていますが、これは「自然の秩序」と書いている。つまり「自然」(秩序)と「人工」(工夫)が対比されているわけです。

では、自然の「秩序」って何んだ、「自然」とは何んだ、というわけです。結局、資本の、個別資本の、企業資本の運動です。そうははっきり書いています。これは、日本固有の理論ですね。個別資本の、企業資本の運動をとらえるのが複式簿記の記録計算だと。

これはさっきも少し言ったけれども、中西、木村、馬場、それから現代では数少ないですが慶應の山榘、笠井説。1つの系譜というか、学説の流れ、系統図、こういうのを描いて(素描)みたい気持ちがある。そういう全体の系図みたいなやつだね。つまり、もうちょっと言うと、進化、発展の系譜、そのツリーがどこからどういうふうに分かれて、どうつながっているのか、という。学説史の進化論的な、生物の進化史みたいな、ああいう全体の系図を描くと面白いなと。とにかくそうした全体の系図から見て、今はどうなんだ、その位置感覚ですね。別の言い方をすれば、俯瞰、俯瞰でものを見る、ということですね(学説俯瞰)。

7 日本のオリジナル理論

一企業資本運動説と試算表等式論の意義

それで、それらの学説は日本の固有、オリジナルな理論ですので非常に魅力がある。僕がまずもって魅力を感じたのは、実は木村説なんです。木村先生の発想というのは、この文献でいけば、①(「試算表等式論覚書(1)」1993年)、お

よび②(「試算表等式論覚書(2)」1993年)に書いていますけど、そこでは安平説、木村説、山榊・笠井説、これら3つの学説を対比して、それぞれ「組込」論、「転化」論、「分化」論、こういうふうなかたち対比してとらえた。詳しくは読んでほしいんですけども⁶。

端的には、文献②の10ページです。文献②というのは随分古いで、もしお持ちならそこに書いています。木村説の展開がなんでそんなに魅力あるんですかと問われたら、僕はこう答えるな。ある種、非常に難解なんだけど、木村説はまさに弁証法的な、要するに対立と統一という、つまり、それまでの勘定理論、勘定学説を止揚するという発想ですよ。どういうふうに止揚したのか、ここが極めて面白い、興味深いんです。そこはぜひ勉強してほしいと思いますが、手っ取り早くはその論考を読んでもらえば、わかりやすく書いているつもりですから。

簡単にいいますと、じゃあ従来の勘定理論、あるいは勘定学説って何かというと、1つは資本勘定学説です。これはいろんな人、ベルリーナ、ヒューグリ、シェアー、ペイトンまで入ってくるんですけどね。それからもう一つは、損益勘定学説、これはワルプ、スガンチーニ、レーマンと、こういうふうに大きく2つに分類するんです。そしてこの2つの従来の説を、これすべて外国文献なんだけど、これを止揚するという発想です。

では、どういうふうに止揚したのかというと、それは資本と損益の対立と統一。で、対立というのは、比較的わかりやすいと思う。資本勘定学説と損益勘定学説と分かれているんだけど、問題はどう統一するかです。統一したら、ということがわかると思ったら、それぞれが統一された後の形から見ると、それぞれ一側面しか見ていない、こうなっていくわけです。

そうなると、損益と資本の見地をどう統合するかですよ。これが、僕は非常に魅力的で、これが後の、山榊・笠井説と違うところなんです。動的転化論、これがそれを端的に言いあらし

ている。すべての勘定は資本の勘定であると同時に損益の勘定だと。これ難解なんだな。ちなみに、仏教的にいうと、「生はすなわち死である」(生即死)というような言い方に近いですね。「即」っていうね、イコールじゃないんです。これは余談ですけどね。

こんな図を用いて解説していますけど(文献①の57ページ)、残高試算表が2つ示されるわけです。だから平面でなく立体で表さないといけない、対立と統一という。そうすると、従来の学説が、統一した後の姿から見たらこうなるよというか、位置づけ、相対化されるわけです。ちなみに言えば、弁証法は(史的)相対化の方法でもあるんですね。

さて、その後、どういうふうにつながっていくかということ、山榊・笠井説と。そうするとその転化論じゃないんです。合計試算表まで、試算表等式ですから。そのあとに、 P/L 、 B/S に分化していく。この試算表を中心に。ところが、同じ試算表の見方でも、木村説はその試算表の分化じゃなくて、それ自体に資本と損益の見地が、すべての勘定、資本の勘定と同時に損益の勘定だと言っている。聞きようによっては、ごまかしじゃないの、と思うような(一同笑い)、そうでしょ?「生きていることは死んでる」と言っているようなもんだから、生きてるやないのってね。木村が言うからさ、深遠に聞こえる。僕が言ったら、ごまかしだよ、違う?(一同笑い)

僕が言いたいのは、木村説の魅力がどこにあるのかという点でしたが、これももちろんだけれども、安平先生の遺言というものを、ここを出発点にして考えていくと、どういうことが発展的に出てくるかっていう、この点です。僕は、木村説に非常にアトラクティブな側面を見たから、当然そっちのほうをやってみたかったわけ、もっと。僕の言っている「算法的」に対して、「実質的」(実体的)試算表等式というかたちでね。

安平先生の講演のお話はその直後から、急に僕の話になってくるんだ。「それから大阪市大

6 拙著『基礎学問としての会計学』(中央経済社、2018年)第9章参照。

の石川さんの書物を…」とか。非常にありがたいんだけど。ここに、私、何年かぶりに読んだんだけど、こう言われているんです。

「石川さん自体が、実体・名目2勘定系統説(安平説—引用者)を主張されている、賛同されているというわけではありません。しかし、それをベースにして、複式簿記の構造というものを考えています」。僕は、まさにそうなんです。だから別に、木村理論の流れのほうで、やってみてもよかったです。本当に魅力あるから。でも、山根・笠井説がまたすごい理論を展開されたから、これはもう僕がやることはないなど(笑)。ただ、笠井理論は相当勉強しましたけどね(笠井理論との出会いは後掲文献⑭参照)。

僕はまさに、安平理論をベースにしたら、どういふことが見えてくるか。もう少しいうと、複式簿記が本来的というか、基底にというか、そこに持っている「構造」というもの、これを明らかにしてみたい、そういうことを考えたんです。だから、ここでレジюме資料にも書いてるように、キーワードを挙げれば人工、道具、弾力性、柔軟性、フレキシビリティ。これが後々、単式簿記の扱い、その位置の話、キャッシュフロー計算の話、それから複式簿記とは何でありうるか、そういう話しに全部つながってくる。

僕は、残高勘定と損益勘定が、あとじゃなくて最初から組み込まれているんだと、そういう見方をしたんです。安平説をね。だから、はじめに残高勘定ありき、損益勘定ありき。笠井説での「分化」というのは、残高試算表からあとで抜き取られていくんです。最初から残高勘定、損益勘定があるんじゃない。そういう組み立てになっているんじゃないかと。ちなみに、木村説は、先にも言いましたが、資本と損益の関係が対立と統一の関係、だから立体的に書かないと説明がつかないわけです。

つまり、木村説からさらにさかのぼる、日本の古典理論とも言われる、いわゆる個別資本説、あるいは個別資本運動説。G—W—G' というと、

過去の遺物だ、もう役に立たない、古びた、色あせたもの(過去の遺産)だと言われる。G—W—G' と書くだけでね。本当にそうでしょうかね。企業資本の運動をとらえるんだというね、それは中西寅雄から始まるわけです。だから日本の固有の勘定理論でしょう。その発展というのは魅力がある。その中に位置している木村理論というのは、どういう理論を展開したのか、ということをね。

ただ僕は、繰り返しになるけど、やっぱり安平先生のやられた実体・名目2勘定説というものの、あの弾力性とか、人工性、脚注に書いてあるんだけど、ノーベル経済学賞を受賞したH. サイモンが言っている「人工物」と非常によく似ているな⁷。そういう複式簿記の見方からすれば、どういふことが見えてくるんだろうと。結局、それは後々触れますけれども、キャッシュフロー計算の話しにもつながってくる。そのことは、安平先生の遺言の中でも、少し触れられていますね。

※インタビュー(後半)での下記3~7は割愛。そして、8以下の番号を本稿ではインタビュー前半に続けて8以下とする。

- 3 複式簿記の弾力性—歴史と理論
- 4 収益費用勘定の性格、名目勘定性の意味
- 5 複式簿記の2面性をめぐって—取引かシステムか
- 6 3勘定系統について—資本と利益とキャッシュ
- 7 複式簿記のサイエンスという見方—見えない構造

8 現実に存在しないものを考える —見えてくるもの

竹中 この、先ほどの先生が示された、図表7.6(文献⑦、P/LとC/Fの複式仕訳の対比)、確かに全く同型なんですけれども、これはまたキャッシュフロー計算から通常型の、キャッ

7 H. A. サイモン／稲葉元吉・吉原英樹訳『システムの科学』(ダイヤモンド社、1977年)参照。

シュフロー計算書も損益計算書もそうですけれど、通常型の仕訳、貸借複記のかたちに戻していくと、矛盾が生じるっていうふうに前々からおっしゃっているわけですよ。

石川 そうです。ただ、ここはちょっと難しいところですが。

竹中 私なりに矛盾の出所っていうのをずっと考えていたんですけど、やっぱり借方に、あるいは貸方に何を置くかっていう、その部分に規定されるのかなというふうに。

端的に言えば、例えば、キャッシュフロー計算書の、こちらのほうの著作(文献⑤)に書いてらっしゃったんですけども、企業会計にとって最初から最後まで、具体・抽象の対の動態関係として、というふうに書かれている部分があったんですが、つまりその具体・抽象が何かっていうと、結局ここでは現金と資本ということになってくると思うんですが。この辺り、先生ご教示いただけたらなと。

石川 かなり突っ込んだ議論というか、そもそもこの矛盾の出所、何が矛盾しているのかってこと、まず理解してもらわないと、竹中さんが先ほどから言われていることの意味がわからないと思うんですけど。(以下は少し難しい議論になるので、読み飛ばしてもいいこうにかまわない)

簡単にいうと、『複式簿記のサイエンス』131ページの右側のC/Fの仕訳(代数符号を用いた仕訳方式、「形式その2」)を、普通の仕訳に戻すんですね、つまり「形式その1」、通常の貸借仕訳形式です。そうしますと、例えば、どの仕訳でもいいんですが、3番の仕訳、(借方)資本-15/(貸方)給与支払-15、そのマイナスをひっくり返します。プラスにするため、反対側にもっていくわけ。すると、(借方)給与支払15/(貸方)資本15、こうなります。ここでよく見てください。ここにちょっと矛盾があるんです。

なぜかという、給与支払っていうのは、もともとP/Lから見れば費用ですよ。だから、

そこでは資本はマイナス15(資本-15)になっているでしょ、費用だから。収益だったらプラス。先ほど言った128ページ、その複式仕訳の要点(同書図表7.4と図表7.5)、何も間違っていない。論理一貫しているんです。

それで、もとに戻って131ページの右側のC/Fの仕訳をひっくり返します、通常の貸借仕訳のやり方に。そうすると、先にみたように、3番の仕訳で資本が貸方に15となるけど、その内容は給与支払いですから、なんで費用が貸方資本なのか(貸方は収益)、こうなるわけです。これ矛盾と言ってるんですよ。そこだけでなく、すべての仕訳が反対になるわけです、実は。借方の給与支払15、ここも現金支出なのに貸方でなく借方にきています。

僕は、その矛盾はこういうふうを考えれば解決しますよ、ということを書いたのが文献⑩です。ここまでやりだすと、本当にその論理に関心のある人しか(笑)。その論文の補論2というところです。つまり通常形式の正体っていうものと、それから常に、つまり暗黙裏に損益計算をベースに考えているということ。

しかし、キャッシュフロー計算だと全部、貸借反対になるんです。B/Sの勘定科目は全部反対。資本が左側の借方、資産・負債は右側の貸方になるんです。だから何も矛盾していないんです。

矛盾していることの出所はどこかという、繰り返しますが、思考が依然として損益計算の世界にとらわれているということ、それにとらわれてキャッシュフロー計算の仕訳を考えたから、こうなる。でも、ここは難しい。だけど、非常に面白い、原理的な見方の大切さという点でね。

もっという、それ2つ目の点にかかわるかな、フィニー勘定のね、ここに歴史専門の先生がいるけど、泉谷説に注目しているわけです。(借方)現金=(貸方)資本、最初の出資金の話なんだけど、そこにどういうことが書いてあるか、どこに着目するかっていうと、フィニー勘定の性格というのは、現金勘定の性格を内包した出資主勘定、端的には「出資主現金勘定」、

こう言ってるんですね。つまり資本Kの性格、現金勘定。

これ、文献⑥の付論1に書いたけど、僕は非常にヒントになってね、論理と歴史の照合ということで、これは僕がやらないといけないんだけど。だから、レジュメ(補足の1)に、A(現金) = K(資本)と、最初の払込資本の複式記入を書いた意味はそこです。これはその矛盾の出所と関係しています。

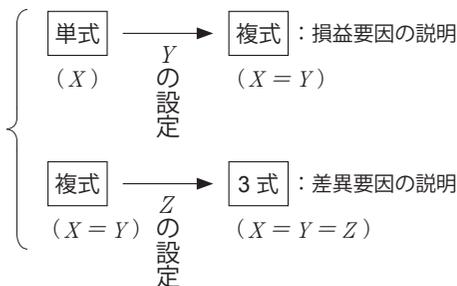
竹中さんにやってもらえば、ありがたい(一同笑い)。歴史だから、橋本さんと、竹中さんで。

和田 それでは次に。

石川 3式簿記ですか。3式簿記の話っていうのは、非常に興味深い。問題はどこが面白いかですが、それはどこかっていうと、端的には僕のテキスト『複式簿記のサイエンス』(後掲文献⑦)の第3章(48ページ)の図表3.7です。ここを理解してもらえば。

だから、1つ1つの仕訳が3式記入(triple entry)になる、とかいう話じゃないんですね。システム全体の構造です。そして、図表3.7(本稿の図表1)で言わんとしていることは、単式から複式、複式から3式、このそれぞれの展開のロジックは全く同じかたちをしている。ここが言いたいところです。特に、「それぞれの展開」という点に注意してもらいたい。

図1 簿記システム化
—新たな勘定設定と要因別説明計算書—



それからもう1つは、ビルトイン機能という、これは複式簿記と全く同じ。で、そのビルトイ

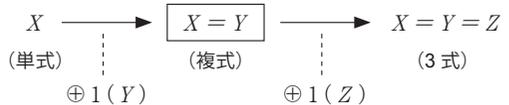
ン機能というものを言語としての簿記という、つまり「釈明と簿記」というところで説明していますが、それは最後にハイエクの話(市場機構の意義)にまでつながっていく。複式簿記の「無言の力」という点です。

こういうところに3式簿記を考えていく面白さ、それからその意義というか意味合いですね。それは、何度も言うようですが、ズバリ言って「相対化」です。つまり、3式簿記そのものもさることながら、むしろ3式簿記の展開によって複式簿記というものが、逆により高い次元からよくわかる、よく見えてくる、ということです。だから現に存在しないものを考えるということが、やっぱりここでも生きている。

それをもう一度いうと、図表3.7(本稿の図表1)の単式から複式、XからYの設定(X=Y)ですね。そして、複式から3式は(X=Y=Z)のZの設定、つまり前者での新たな勘定Yの導入と後者での新たな勘定Zの導入との同型性です。

そして、3式から今度は複式を見ると『複式簿記のサイエンス』の図表3.8(本稿の図表2)ですが、そこでの逆の矢印。そうすると、今度は複式の次元を1つ落とすと、Xだけ、つまり単式(1式)もわかってくる。こういうとらえ方ができるんじゃないかと。

図2 単式、複式、3式
—複式簿記の相対化—



そうすると、複式簿記、つまり2式簿記の構造が、3式簿記という1つ次元の高いレベルから相対化できる。これも1つの相対化の視点です。複式簿記とはそもそも何かってことを考える際に、現にある複式簿記の中でいくら考えても出てこないって思考の限界がある。何か別物、ここでは現実にはないもの、つまり3式簿記、これを持ってくる、考えることの大切さです。

9 複式簿記の軽視という現状 —現代会計のあり方と複式簿記

和田 それでは、最後の論点に移らせていただきます。レジュメの論点(参考資料の7—本稿では割愛)で、近年のIFRSのコンバージェンスやアドプションという議論の中で、複式簿記の記録というものが、非常に軽視されているというようなことが言われております。

こうした複式簿記の軽視という現状を、石川先生自身はどのように見ておられるのか、お考えをお聞かせいただければと思います。

石川 このインタビュー企画は「現代簿記論に関する研究」となっていますよね。そこでの「現代簿記論」の意味合いですが、ここではその「現代」を現代会計とのかかわりとして議論してみましょう。やはり簿記と会計との関係の議論になってきます。

つまり、一番大きなところでいくと、レジュメの論点ですが(参考資料の7—本稿では割愛)、やっぱり投資家への情報の役立ち、つまり情報開示の今日的優位性という現代会計のあり方と、複式簿記を基礎におく計算構造の希薄性、これは「表と裏」だろう。そう思いますね。

1つの手がかりは、収支的期間損益計算(収支を基礎におく期間損益計算)という記録計算の仕組み、構造ですね。収支計算と複式簿記というのはつながっている。そうするとIFRS、あるいはそれを支える概念フレームワーク、そこにどのような計算構造があるかっていうのは、吟味する必要があるんですね。

これは、一見すると資本等式の構造を持っているんですが、『複式簿記のサイエンス』の第15章にも書いたように、勘定学説として、あるいは勘定理論として、あるいは会計構造論として議論できるものかどうかということ吟味する必要があります。その1つとして、会計構造の違いの基礎に会計思考の違いがある、という話を

しました。それが大きなヒントになるんじゃないかと思うんです。

そうすると、どういうふう考えたかという、その概念フレームワークだとかIFRSの基礎、あるいはその背後にある会計思考、それが何かということ吟味する必要があるわけです。それで、その会計思考って何かっていうのは、企業価値思考だ、というふうに書きましたけれども、結論から言えば、先ほどの収支的利益計算というものを話しましたけれども、それと対比すればわかりやすい。それと馴染むものじゃない、まったく性質の違うものだと。

ちなみに、放送大学の講義では、その収支を基礎におく伝統型の「水の会計」に対して、IFRSに代表される現代型の会計を「油の会計」、こういう水と油のたとえでもって、まったく異なる会計だという話をしました。ギラギラした油が、これまでの水の領域に侵入、侵食しているとね。そういえばわかりやすいでしょう。

ここでは、特に「水の会計」のコアにある収支の枠、あるいは収支の制約という点を強調しておきます。その枠が伝統的会計制度のいわば「安定装置」(アンカー)だったといえるからです⁸。「油の会計」はそれとは別もので、収支の枠という伝統枠の観点からしますと、そこから離脱・脱却しているともいえますね。

もう一度言うと、最初に言いましたよね、勘定理論とか、その学説史というかたちで、そもそもつかまえていけるようなものなのか、っていうわけですよ。確かに、概念フレームワークも1つの計算構造を持っているようにも見えます。もっと言えば、資本等式の構造を持っているようにもね。だって、収益費用は持分のコンポーネント(内訳要素)と言ってるんだから、下位勘定ね。何の?資本でしょ?それで、持分、資本、これは資産から負債を引いたものだと言っているんだから。

何だ、先祖返りかと。安平先生に言わせたら、多分、それは歴史的にとっくに論議されたもの

8 アンカーとは中心的役割を果たしているもののことをいうが、ここでは収支の制約を、アンカー(錨)の文字通り、安定装置(安全弁)と理解するとよい。この見方からすれば、現代の会計は“アンカー不在”の会計といえることができる。前掲拙著『基礎学問としての会計学』141—142頁参照。

だよと。資本等式、貸借対照表等式、勘定学説のながれでずっときたわけじゃないですか。確かにバランスシート、資本等式であれ、貸借対照等式であれ、バランスシートを基本にしているから、B/Sを中心に観てるわけですよ。あと収益費用勘定の位置づけが、どう違うかという話だよ。あるいはまた、B/Sだけで見れば、負債を財産のマイナスと見るか、それとも資本に近いと見るか、というね。

いずれにしても、資本等式っていうのは、そういう勘定学説史上の出発点だったわけですよ。人的勘定学説から物的勘定学説にきて、シェアーがくるわけでしょ。ということは、やはり昔に戻っている、そうなるじゃないですか。だから、一見そう見えるわけね。

一見というのは、もう一つの意味があって、そもそも論になりますが、そういうながれの中で、計算構造、会計構造、基本等式、勘定理論でつかまえられるものなのかどうか、概念フレームワークとりわけその計算構造というのは、それには、その根っこにある会計思考という面から見るのが1つの見方になるんじゃないかと。

じゃあ、現在のIFRSに代表される会計基準ですけども、そこにどんな会計思考があるのかと。「企業会計原則」、こちらを見ましょうと。「企業会計原則」と「概念フレームワーク」、日本では会計基準を支えるものが2つ、つまり2本の柱がある(併存)。しかも両者は異質なものですので、それらが併存するという極めて変則的なかたちになっているわけ。

別の本『変貌する現代会計』にも書いたとおり、「企業会計原則」制定の立役者、中心人物の黒澤清は「企業会計原則」は動態論に立脚し

ている、こうははっきり言っているわけです。まさに収支的期間損益計算の構造を持っているわけですよ。だから僕は、シュマーレンバッハの動態論そのものを会計構造論的にやっぱり相対化しないとイケないと思うんですけどね。会計構造論的にですよ。誰かやってますでしょうか。

ところが「概念フレームワーク」は、動態論に何か修正して出てくるものでしょうか?当然、違いますよね。やっぱり動態論っていうのはフロー(収支と費用収益)を中心に観て、B/SというのはP/L(期間損益計算)のための連結環という性格ですから。連結環っていうのは主役じゃない、脇役ってことでしょう。主役、すなわちP/Lのためにあるわけでしょう、脇役っていうのは。そうすると、当然違うということがはっきりするわけですよ。

じゃ、何だということね。答えるのは難しいかもしれないけれども、企業価値思考というのが考えられる。現代の会計は企業価値の評価に役立つものだとね⁹。そうすると企業価値というものを基礎にした会計構造っていうものを考えないといけないわけですよ。さあ、そういうものが成り立つのだろうか。

複式簿記が収支計算というものを基礎に置いてきたということになれば、公正価値会計という測定のレベルから見ても複式簿記に馴染むものじゃない、そう思いますね。そこでは期末のストックの公正価値評価が中心になるんだから、そこでの最終的な行き着く先はと言えば、「複式簿記不要不在の会計」となる。少なくともそういう性格を帯びている。「油」の会計ではね。

ですから、少し余談めいたこととなりますが、IFRSの基礎にかかわっているテクニカル

9 そこにはファイナンス思考が根ざしているといえるが、朝倉祐介『ファイナンス思考』(ダイヤモンド社、2018年)では、その思考の観点(コーポレート・ファイナンス)から伝統的なPL脳の問題性(PL脳の病)が指摘されている。しかし、そもそも2つの思考はそれぞれ目的を異にしている。この点を2つの会計の基礎とあり方(1階の会計、2階の会計)でいえば、現代会計のあり方はPL脳(1階の会計:対株主、決算書)とファイナンス脳(2階の会計:対投資者、投資情報)とのハイブリッド脳に根ざしたハイブリッド会計、になっているといえる。1階と2階の会計については拙著『揺れる現代会計』(日本評論社、2014年)図表4-1、4-2(31,32頁)、ハイブリッド会計の形(2階建て構造)は図表5-1(39頁)、そしてPL脳の病については拙稿「PL脳は病なのか」(『週刊経営財務』2018年12月24日号)、をそれぞれ参照。

スタッフの人たちがどんな簿記会計の教育を受けてきたのかっていうこと、僕は本当に知りたいな。ボードメンバーじゃないんですよ。ボードメンバーもそうなんだけども、日本(ASBJ)でいえば専門委員ですよ。僕は、推測の域を出ないけれども、もちろん会計構造論とか学説史なんてやってる人、まずいないと思いますよ。

専門にやっているのは何かといったら、ファイナンスであったり、資本市場にかかわる専門の人とか、あるいは統計学的手法にたけた人とか、そういった人たちじゃないか。基準作りにかかわっている人たちは。となってきたら、IFRSの中にどんな会計構造論的なものがあるかって議論してもですね、なんかこっけいな感じもするんですね。こっけいと言うのは、もともと違う性格のものを、つまり、土俵が違うのに、われわれが勝手に同じ土俵だと思って一生懸命議論するってことの。やってもいいんだけど。

ですから、企業価値を志向する今日の会計を、少なくとも伝統的な意味での勘定理論とか、会計構造論で説こうとするときには、非常に無理があるんじゃないかというのが、僕の今の見方です。土俵が違うんです。同じ土俵でがっぷりよつつといかない。同じ土俵なら正面からぶつかってもいいんだけど。

それを僕は議論の「場」(土俵)と言っていますが、重要なことは、その「場」そのもののあり方を見ないとね。それこそ、こっけいな議論になっているのかもね。

10 方法の重要性

一「見えないもの」を見せる

あとは、もう時間なくなったから、言いかけてやめたところなど、今からここで話します。

僕にとって、今から振り返ってみればですが、

非常に重要だと思うのは、かなり古いけど文献⑧の「構造としての会計科学」(1983年)なんです¹⁰。

そこに『親族の基本構造』と書いてあるんだけど。これ、あのよく知られた文化人類学者レヴィ=ストロース、この前亡くなったけど、その人の代表作の1つです。僕が大学院生のときに、別の本だけ『悲しき熱帯』を文学部の大学院に受講に行ったぐらい、ある種かぶれましたね。ちなみに、その後は、公理主義の数学集団ブルバキに熱中してね、のめり込んでいく。

レヴィ=ストロースの話に戻るけど、文献⑧の中に書いているんだけど、非常に泥臭い、ああいう文化人類学だから。でも、そうした親族(婚姻)関係の中に数学的な構造(親族の基本構造)を見つけるんですね。代数の「群」という構造なんだけれども、こういうところに大きな知的関心があったわけです。

僕はですね、生々しい商人の営みからでてくる複式簿記という記録計算も、同じように見るんです。親族の基本構造のように、どっかに隠れて見えない構造があるんじゃないかと。そういう発想がね。そういう発想というのは、複式簿記の構造論でいえば、前に述べた安平理論をベースにすると、こうなんかすつと入ってくる、僕には。

もちろん企業資本の運動を補足するということにも、そうした、つまり今言った構造主義的な思考方法に馴染むところ、それを見つけることも可能だと思う。やってみたい気もあるんですよ。企業資本運動の学説でも、ケーファー・安平理論でも、僕のやりたいことは、このドロドロした生々しい人間の営みの中に、実は見えないけど、何か数学的な構造というものが潜んでいるんじゃないか、隠されているんじゃないか、そのことを明かしてみたい。先の「親族の基本構造」のようにね¹¹。

10 前掲拙著『基礎学問としての会計学』第13章所収。

11 ちなみに、木村説での複式簿記(技術性、形式)と企業簿記(歴史性、内容)との区別に敷衍すれば、先のC/Fも含めて歴史的に現れる企業簿記の(歴史的)形態とその基礎ある(共通して存在する)複式簿記の(技術的)構造との関係、つまり技術性(形式)と歴史性(内容)の区別とともに、その両者を

それで、僕はよく例に出すんだけど、自然数をどうやって発見するか、「ペアノの公理」ですが、これがまた魅了的ですね。僕が若いときに、ある種はまった、こういうものに大きな影響を受けている。慶應で話した「会計研究のアンビバレンス」の中にも書いています(文献⑭、本誌次号掲載予定)。これがやっぱり方法というものをはかなり意識して、つまり「見えるもの」じゃない、反対に「見えないもの」が重要で、それを見せていくという。つまり、「親族の構造」っていうのは、見えないわけですよ。

僕がよく使う「H₂Oのたとえ」。例えば『複式簿記のサイエンス』(図表12.2)の構造と形態と形態化(契機・条件)、この3つがそれです。とりわけ、機能(働き、役立ち)よりも構造(仕組み)、形態(姿、現象)よりも構造(関係性)、と言えはいいかもしれない、私の発想は、「H₂Oのたとえ」、わかりやすく説明していますので見てください。ともかく、構造、そこでは関係性とりわけその同一性を見つけることが要になります、それは肉眼では見えません。サイエンスの眼でしか見えませんね。

もう一つは、木村説の方法論。そこには弁証法的な思考が明確にある。この弁証法っていうものも、また非常に重要だと思うんです。何も古くもない。やっぱり社会科学的事物、出来事を根底的なところから洞察していく、その(生成発展の)メソドロジーとしての弁証法、あるいはここで取り上げた構造主義的な思考方法、こういうものは非常に重要ですね。会計の中の論議だけでは見えてこない¹²。

だから、あとでも述べますが、若い人たちは専門の中だけでなく、より広く「雑学」をすすめますね。実は、先の慶應での話の最初のタイトルは「雑学のすすめ」だったんです。慶應

でやるから、「学問のすすめ」にひっかけて。でもそう思われるのがしゃくで、あとで変えたんですよ(一同笑い)。

では何にするかと、それですぐ出てきたのが、「たかが会計、されど会計」。僕は、会計を「されど会計」にどうもっていくかという大きなテーマ、課題が、ずっとあったからね。それをやらないと、僕は成仏しない、なんてことを慶應講演の最後のところで言いましたから。でもよく考えたら、このアンビバレンスだなと。アンビバレンス、相反するものの双方志向ですね。結局、「会計研究のアンビバレンス」の中で、あっちこっちとさまよっているわけ。

ですから、僕は福岡大学時代にオペレーションズ・リサーチ(OR)や多変量解析を教えたところが、一番ハッピーというか、幸せだったんですよ。で、だんだんアンハッピーの世界に入っていくんですね(笑)。「会計士2次試験合格しているんだから、会計学できるやろ」と言われるわけです。確かに実務経験あります。7、8年やったかな。でも、続けてやりたくなかった。

大きなことは、実務補修のときに、アイジリに出会ったことがね。最初にも言ったけど。後でカーネギーメロン大学の本場に行って、人間井尻の、その魅力に取り憑かれちゃって、どうしても魅力ある人の作品が読みたいと。そうすると、会計から離れよう、離れようとしたら、新たな作品が次々にでてくるわけ。どうしても自分自身がやっぱり探求したいわけだから、離れきれない。そういうかたちで、幸か不幸か、今でもわかりません。本当にわかりませんが、ずっとここまで¹³。

ですから、若い人に言いたいのは、雑学っていうのは本当に大事だよと。雑学というのは、

「つなぐもの」という視点が重要だと考えている。前掲拙著『基礎学問としての会計学』補論8.2(166-167頁)参照。

12 ちなみに、田中章義教授は拙著の書評の中で、私自身必ずしも「方法論的二刀流」を意識してはいないが、次のように記しておられる。「本書には『構造主義』(structuralism)の方法論が底流している。だがそれだけでない。著者は、戦前から戦後を通じて日本の会計学につよい影響をあたえた木村和三郎相伝の『弁証法』(dialectics)をも継承している。この方法論的二刀流が、本書にふかい奥行をもたらしている。」(田中章義「書評：石川純治『複式簿記のサイエンス』、『週刊経営財務』2012年3月5日号)。

13 この点は注(1)参照。

雑多なことをやるという意味じゃないんです。会計の本当の理解は、やっぱり別のものから見ていかないとなかなか見えてこない面がある。そういうことに気づくことがきつとあると思いますね。だから会計であれ、何であれ、その中だけで一生懸命やっている人、それはそれでいいんだけど、その限界っていうのは長年やっていたら自覚するもんだと思うんですけどね、僕はそう思います。

だから複式簿記もそうですよ。僕は必ずしもその専門家じゃないけども、キャッシュフロー計算の複式簿記という、現実(実務)に存在しないものに、ちょっとこだわってみたのは、計算構造の同型性(isomorphism)、あるいはシンメトリー(相似形)、そういうものを追究していたんです。

それには、現にあるものなただけの議論、つまり損益計算の複式簿記では見えてこないの、何か別物を持ってこないといけない。別物、違うものをね。ただ、別物ならなんでもいいというわけではない。何か同型性をはらんだものを持ってくる必要がある。そうすると、今議論している物事の相対化がはじまるんです。

そうすると、損益計算に2つの方法(損益法と財産法)があるのと同じようにキャッシュフロー計算の方法に2つあるじゃないかと、2つの作成方法がね。直接法と間接法。しかも、単に2つあるというわけではなく、その原理を明らかにすると共通点(同じ形)が見つかる。つまり、同型性をはらんでいるわけですよ。あとはそれを論証するだけの話。で、僕は僕なりに、論証したわけです。誰も納得してくれないかも知れませんがね(笑)。1人でやっとな、という感じだと思いますよ。でもいいんです。そういう意味ではね、物事(ここでは複式簿記)を徹底的に相対化するということがさえわかっただけならね。

ですから、簿記にしろ、会計にしろ、少なくとも教育の姿勢というのは、そういう、すべて素材だという発想でやっていますから。相対化

すること、あるいは常識とか通念とか、もっていけば時代の風潮とか、そういうものにとられない自分を確立していくこと。相対化の力はそこにこそ発揮される。そして、それは、タテやなくてヨコ、「ヨコの学習」が大事だよと。相対化なくして物事の本当の姿は見えてこない。逆に言えば、「見えてくる」感覚が大事だよ。いつも強調しているところです。

11 「教養」としての会計学

—本当に役立つとは

じゃあ、その「見えてくる」感覚というものを獲得するには、どういうことが大事かということ、1つは本当に「理解する」とはどういうことか、この点にかかわります¹⁴。ここでは先に少し触れましたが、放送大学のテレビ講義でやっているんだけど、「教養としての会計学」ということを少しお話してみます。

簿記であれ会計であれ、あるいは何であれ、常に心がけていることっていうのは、突き進んで行くと、本当の「教養」というもの、つまり「生きていく」ということ、こことつながらないと駄目ですよ。結局、自分自身のことを言うんですけどね。そうじゃなかったら、やれない。冒頭で震災の問題にふれたのも、実はそこと深くつながっているんです。

ですから、結局、今役立つものだけを教育するんじゃないで、逆説的だけど、今すぐには役立たないものこそ教育せんといかんと、それが実は本当に役立つことにつながるんだと。国家試験に歴史の問題はでない、だから歴史やっても役立たない。でも本当に役立つんだ、という教育をね。試験にでないから教育しない、というのはまったく逆ね。

僕は簿記教育において、必ずしも専門ではないけれど、まず先に歴史をやりたいですね。できあがった複式簿記ではなく、出来上がるまでの簿記をね。歴史のなかで現在の位置を知る(史的相対)、これが大事だからです。簿記会計の

14 この点は前掲拙著『基礎学問としての会計学』の「あとがき」参照。

学習においても例外ではない。言うまでもないことですが。

だから学生に検定3級の勉強させないんですかと問われたら、そういうわけじゃないけれども、「自分でやりなさい」と。その学習の仕方やガイダンスだけは、2, 3回ぐらいの講義だったとしてもいいけど。それぐらい、本当はやりたくないですね。だって3級ぐらい独学でやれるでしょう、大学入試受けて入学しているんでしょうと。

だから、結局、僕はそうだな、やっぱりこの教育という面で、研究もさることながら、それは多かれ少なかれ独りよがりの面がありますから、教育というのが大切だなと。

研究というのは、ホームページに掲載している「批評眼の大切さ」(文献・資料⑬)だけど、まあはっきりいって、何のための学問か、厳しい言い方だけど、独りよがりの「学問ごっこ」のようなことはしたくない。それは、意識するしないにかかわらず、僕はかなり意識しているけど、言わばプリデンド(装い)ですね。自分も含めてのことなんだけど¹⁵。

大きくは「生きていく」ということ、そういうものの支えになるものかどうかっていう、そういうことが、簿記や会計でもできるんだと。だから僕は、俗っぽい簿記や会計の世界でも、本当の意味の「教養」につながるものなんだということ、あるいはそういうものでありたいということ、それが「されど会計」ということの意味だと。「たかが会計」と言われそうなところで終始しちゃ駄目だよ、というわけです。

結局、冒頭での石巻の竹中さんとの話なんですけど、今どういう性質の危機にあるのか、そのなかでの僕たちの研究や教育のあり方はどうなのか、という点で強調したことになりますね。

何のための学問か、学問の力はあるのか、教育の力はどうなのか、ということでしたが、これでやっぱり冒頭とつながりましたね¹⁶。

和田 石川先生、長時間にわたり本当にありがとうございました。これで、インタビューのほうは終了といたします。本日はありがとうございました。

石川 たいへんご苦労さまでした。私こそ、お礼申し上げます。

橋本 ありがとうございます。

追記(橋本・和田): 事前にいただいたレジュメ資料から関連文献だけ記載しておきます。インタビューにでてきた関連文献の参考にしていただければと思います。

付記(石川): インタビューの時間制約でお話しできなかった論点など、補足のために拙稿「複式簿記の見方・考え方・教え方(上)(下)ー理論・歴史・教育の接合ー」(駒澤大学『経済学論集』第44巻第1号、第2号、2012年9月、12月)をあらためて書き記しました。インタビューと合わせて、ご参考にしてもらえば幸いです。なお、事前に用意したレジュメ資料は私のホームページに掲載しています。

関連文献

- ① 石川純治(1993a)「試算表等式論覚書(1)ー『2面的損益計算』説と『企業資本運動』説ー」『経営研究』第43巻第5・6号。
- ② 石川純治(1993b)「試算表等式論覚書(2)ー『2面的損益計算』説と『企業資本運動』説ー」『経営研究』第44巻第1号。
- ③ 石川純治(1996)「企業会計システムの簿記論的基礎とその展開ー安平昭二著『会計システム論研究序説』によせてー」『経営研究』第47巻第2号。
- ④ 石川純治(2004)『経営情報と簿記システムー簿記の伝統と革新ー(4訂版)』森山書店。

15 この点は、拙稿「複式簿記の見方・考え方・教え方ー理論・歴史・教育の接合ー(下)」(駒澤大学『経済学論集』第44巻第2号、2012年12月)「11 むすびにかえてー学問と世間」(86-87頁)参照。

16 何のための学問かについては、注15の文献参照。そこでは真の教養と自己目的研究の問題性に触れている。

- ⑤ 石川純治 (2005)『キャッシュ・フロー簿記 会計論—構造と形態—(3訂版)』森山書店。
- ⑥ 石川純治 (2007)「資金計算書の歴史的展開と数学的展開—その照応関係の一視点—」『駒沢大学経済学論集』第38巻第4号。
- ⑦ 石川純治 (2011)『複式簿記のサイエンス—簿記とは何であり、何でありうるか』税務経理協会(増補改訂版2015年)。
- ⑧ 石川純治 (1983)「構造としての会計科学」『福岡大学商学論叢』第27巻第4号(『基礎学問としての会計学』第13章所収)。
- ⑨ 石川純治 (2010)『変わる会計、変わる日本経済』日本評論社。
- ⑩ 石川純治 (2008)放送大学(DVD全15回)『現代の会計』放送大学教育振興会(共著、発売は丸善、2012年より新番組「社会のなかの会計」)。
- ⑪ 石川純治 (2012)「複式簿記の相対化—より原理的なものへ—」『税経通信』1月号。
- ⑫ 石川純治 (2012)『金融・開示・取引法』優位の現代会計』『企業会計』2月号。
- ⑬ 石川純治 (2007)「批評眼の大切さ」京都大学、大東文化大学(HP「学会・セミナー」コーナー掲載)。
- ⑭ 石川純治 (2004)「会計研究のアンビバレンス」慶應義塾大学(HP「講演」コーナー掲載)。
- ⑮ 井尻雄士・斎藤静樹・石川純治 (2006)「会計と物理と漢詩—井尻雄士先生古稀記念—」『駒沢大学経済学部研究紀要』第61号。
- ⑯ Ijiri Y. and J. Ishikawa (2002) “Balance Sheet and Change Sheet”, *Osaka City University Business Review* No.13.